石井式漢字教育革命

改訂新版　序

思えば本書が刊行された昭和五十二年ころの教育界は、幼児の漢字教育は全く否定的であった。「カナの学習さえ早過ぎるという幼児に漢字を学習させようとはとんでもない意見」と、私の提言を一顧の価値も無いと退けたものである。

しかし、それから二十年、変わらないようでも世の流れは変わった。文部省を中心とする幼児教育界の主流は、「幼児期の文字学習は早すぎて適当でない」という世界の潮流に順って依然として漢字教育を否定し続けているが、世の大勢は確実にこちらの方に傾いて来ている。

久文教育研究会が私の提言を受け納れて、幼児の漢字教育を始め、今では全国の数十万の幼児が漢字を学習しているのを始め、幼児開発協会や七田教室など、全国の幼児学習教

室という教室が、挙げて漢字教育を行っている。文部省の意見がどうあれ、世の親たちは、今や幼児の漢字教育を歓迎し、受け納れているのである。

とは言え、手放しで喜んでばかりはいられない。それは、「誤った漢字教育」が横行しているからである。例えば、先入観から「漢字学習の前にカナ文字を教える」というのもその一つである。正しい漢字教育でないと、折角の幼児の漢字教育でも百害を生じて、少々の利益があっても何にもならない。

本書は、正しい幼児の漢字教育を行うためには、二十年経った今でも必要欠くことのできない書であると信じ、これをそのまま世に送る次第である。

平成七年二月十日

石井　勲

追記　石井式漢字教育は中国大陸及び台湾次いで韓国に普及している。ことに中国では数十万人の幼児が実践していて、その指導団体の北京国際漢字研究会から名誉会長を移植されている。

はじめに

どんな学問をやるにしても、その方面における権威のある書物を読んで、それを理解することが、誰にとっても基本である。だから、読書力の強い者ほど、多くの知識を身につけることが出来て、その方面で成功する可能性が大きい。日本人である限り、その読書力の基礎になるものが漢字力である。だから、漢字力の強い子供ほど、読省力が強く、従って、学力が高く、学校の成績が良い。その事実は、すでに昭和三十七年、慶応義塾普通部

で証明されている。

日本を除く世界のすべての国が、小学校の三年生まで、学習時間の半分以上の時間を国語の学習に当てている（わが国だけがわずかに四分の一である）が、それは、読み書き能力が低くては、社会科の学習でも理科の学習でも、進めて行きようがないからである。

読み書き能力が高くなれば、社会科の学習でも、わずかの時間で価値の高い学習を進めることが出来る。反対に、社会科の学習時間や理科の学習時間がどんなに多くあったとしても、読み書き能力が低かったら、学習効果は得られない。だから、どこの国でも、〝読み書き〟学習に、他の教科とは比べものにならないほど多くの時間を当てているのである。

ところが、戦後のわが国だけが、読み書き学習を軽視しており、漢字教育を軽視している。最近、七五三教育と言われて、今の学校教育について行ける子供は、初めは七割で、小学校卒業時には五割、中学では三割になる、と言われているのも、その原因を突きつめてみると、教科書が読めないことにある。つまり、漢字力の不足にあるのである。

実は、このことは、私が指導主事をしていた昭和二十年代から一貫してずっと続いて存在していることであり、私が二十五年にわたって指摘し、早急に改めるべしと主張し続けて来たところなのである。

昭和四十二年までの、小学生に対する漢字教育の実践で、私は、低学年の子供ほど漢字をよく覚え、高学年に至るほど、その学習能力が衰えていくことを確かめた。それで、以来今日まで十年間、幼児期に漢字教育を行うべきことを提唱しているのである、漢字は目で見る言葉であり、本質的には耳で聞く言葉よりも覚えやすいものである。だから、誰でも幼児期に言葉をひとりでに覚えるように、漢字も幼児期にひとりでに覚えることが出来るものであり、そうさせるべきものなのである。

今の全国の公立小学校が実施しているような漢字教育では、先生や子供がどんなにがん

ばっても成功しないことは、実験済みである。手遅れであり、しかも教育法が拙劣だからである。その上、わが国の公立小学校は、動脈硬化と言おうか、数いがたいほど動きの取れないものになっていて、新しい良い教育法をいくら奨めてもそれを取り入れようともしない。

昨年、公文算数塾の先生方の研修会に、漢字教育について講話を依頼されたが、この時、初めて公文先生にお会いする機会を得、公文先生の達見と実践に私は敬服した。先生は、今、五千の公文算数塾を通じて、全国二十五万人の、小学校ではついていけない子供たちを、算数教育において救っているのである。私も、公文先生にならって、小学校ではついていけない子供たちを、読み書き教育で救ってやろうと思った。公文先生が、出来る限り応援する、ともおっしゃってくれた。昔から、"読み書き算盤"と言われ、外国でも"3R"と呼んでいる。公文式の計算力に、石井式の読み書き能力を備えれば、あとは理科だって社会科だって、目ざす学習は自力で切り開いていけるはずである。

本書は、公文式算数教育と提携して、真に子供のためになる教育の振興に努力することを宣言する書物としたい。

昭和五十二年十月十五日

石井　勲